



中里恒子全集

第十六卷

中里恒子全集 第十六卷

定価二三〇〇円

昭和五十六年二月十五日印刷

昭和五十六年二月二十五日発行

著者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八一

目次

川の鯉

草の敷寝

駱駝

鞍馬苔

バンタムのにわとり

山川草木

乱菊

根曳き

3

27

43

65

93

111

131

153

仮寝の宿

或る手紙

あとがき

解題

181

337

433

434

川
の
鯉

川の石堤に腰かけて、じっと川を見ている男がいる。

「鯉がいる、あんなに大きくなった、」

男は、自分が大きくしたように、自慢気に言った。わたしも立ちどまって、川を眺めた。

「大きくなったこと、」

「ここんここに、七匹、曲り角のところに十四匹、橋の下に、七、八匹いる、」

「そんなにいるんですか、」

「いる場所がきまつてるんだよ、」

合計三、四十尾近くは見かけるが、いつも、そんなにかたまっていてるわけではない。わたしも、再再、見ている。

この男は、勤め人ではない、病人だと、土地の者は言う。もういい年で、顔も皺だらけだが、なんとなくよれよれのズボンをわざとはいているような、貧乏くさくない感じで、あたたかい時は、一日のうち、二、三度は、川のまわりをうろうろしている。

わたしも、長年、川を見ているが、たしかに近年、川の水は澄んで来た。十二年前に、この川

すじ一帯に集中豪雨が降って、家屋に、床下、床上の浸水を見るほどの水害があった。

川は、その前にも、つまり、戦時中にも溢れたことがある。土堤はだらだらと、川の岸边に下りられるほどの高さで、この堤の道から斜面にかけて、商店の主や、頑健そのもののたけだけしい五十がらみの女たちが、遠くから、肥桶をかついで耕作に来て、野菜類小麦豆類をぎっしり作った。

堤は、すっかり柔かく耕されて、川岸へらくに近づけるほど、平らにされた。

秋雨の続いた三日めの朝、川は増水し出した。満潮と重なる時は、浸水のおそれがあると、触れが出た。

堤の上の畑作りたちは、雨の中を、豆をもちだり、大根を抜いたり、小松菜をとったり、大童で、まだ出来きらない野菜を抜いていた。

雨脚は激しくなり、川は溢れはじめた。川と、道との境界もわからなくなった。人通りは絶えたが、自轉車で、水流のなかを走り去るひと、家の側について走った。

畑は、みるみる水につかって、堤のトマトの枝が、わずかに、枝先を見せていた。赤い実が、風雨のなかで揺れている。

女の子が、川向うから、水に足を半分つけて、堤の上の、トマトのそばへ歩いてゆく。トマトのそばまで行きつかぬうちに、女の子は、川に落ちた。

水の上は、川と、道が一体となっていたのである。

さざああと降りやまぬ雨の音、流れの濁音だけが天地に響き、川筋に人あしは絶えた。

突然、しいんとした雨中に、ぎゃあっと叫び声がまじり、男女が濡れ鼠で、露地から水を蹴散して飛び出して、川岸で、金切声をあげた。

「落ちたよオ、流されたよオ、」

川に向ってわめき立てた。声は、よく通った。

わたしは、家の中で物案じな気持ではらはらしていたので、何か起った、と蒼白になって、川に面した高窓の前にいった。橋の上を、ひたひたに濁流が越え、わずかに見える橋の欄干につかまった大勢のひとが、ずぶ濡れになって物干竿を持ったり、投網を持ったりして、右往左往している。

「女の子が流された、」

「長作んとこの子だ、」

消防団も、消防車で来た。

濁流にのまれた女の子の姿は、橋桁にからまってちらちらしていたが、激しい早さで川下へ流された。人びとは、海に近い河口に向って走り出した。

おかみさんは、びしょ濡れのまま立ち尽くしていた。

「……水がどの位ふえたらうって、話していたんです、すると、子供が、急に、長靴をはいて庭へ出たので、あぶないから、川の方へ行くんじゃないよ、庭は、少し高いからね、そのうち、見えなくなった、このひとが、レインコートを出せなんて言っているうちに、胸さわぎがして、もう、そのまんまで、出て見たんですよ、」

外へ出て見ると、往来も、川も見境もなく大川になっていた。子供はいない。――

誰かが、河口近くの曲り角で投網を打った。女の子の、赤いものが、濁った水流のなかに、浮き沈みしてみえたからである。

海へ出る寸前のところで、女の子は、網にかかったが、すでに死んでいた。

わたしは、長作という男の顔を知らない。女の子も、そのくらいの年の子が、いつも川のそばで遊んでいたのを見てはいるが、その子が長作の子だということも知らない。

平常は、川の流れは浅く、川底の石を渡って歩けるほどの水量しかないのだ。ただ、満潮時には、海水が逆流して川は増水するが、じきに、水は、海へ流れるので、川は、いつも穏かであった。

しかし、女の子が川に落ちたのは、川の堤防が出来ていなかったこと、川のへりに、柵がなかったことが、あとで、やっと問題になった。

川ぶちの土堤の畑作りも、法度になった。

それでも戦争が終るまで、堤の上の道の端のわずかな地面に、豆は生えていた。川は、雨が降り続くと、すぐ、大川のように滔滔と流れが急になる。雨がやめば、みるみる水は引いて、浅い川になるために、誰も、一時的の現象としてしか、水流の変化を気にしなかった。

女の子が溺死してはじめて、川岸に、柵が必要という話になった。危険な場所も、いつでも必ず、ひとりふたり死人の出るような犠牲があつて、ようやく、役所というところが動き出す。

「川浚いをしたらどうなの、」

「そうだね、以前はやったもんだが、」

「やればいいのに、川底を深く浚えば、溢水もすくなくなるでしょう、」

「予算がないんだそうで、それに、川は、県のもので、市では、手がつけれないんですよ、管轄が違うんで、」

「川は、県や、市のものだけではないわ、みんなのものだわ、危険にさらしておいて、責任は、誰もとらないのね、」

わたしは、傷んだ屋根を修繕に来た瓦屋の主と、そんな話をした。もう戦後である。

一向に、川浚いの様子はない。川の水は、まるで浅くなって、塵芥や破れ蒲団や、こわれた自轉車や、油や、板にくくりつけた、何がはいっているとも知れぬ大箱などが、川上から流れて来る。潮とともに流れ去ってしまうものもあるが、川岸の草場に打ちあげられて、幾日も、捨てられた芥は、置き去りにされている。その上に、ビニールの白いものが、引っかけて、見るからに、川は、よごれ、悪臭を放っていた。

下水も、台所の汚物も、洗濯の洗剤の泡も、ぶくぶくと、川の表面に溜っている。

わたしは、川の上に、物件を張り出すのは、規則としてかまわないということを、きいた。手入れに来た植木屋の親方が、

「……見るさまあなくなりましたな、昔は、鮎が上って来たんですからな、」

昼休みの弁当をしまつて、一服しているところへ出たわたしに、そう言う。

「そうですよ、覚えてるわ、岸辺に小舟をおいて、海へも出られたし、潮のさして来るときは、

舟で、このへんを夕涼みしたり、」

「左様でした、鰯釣りも出来ましたな……こんなに川がよごれたのは、戦後、川上の方の山を崩して、むやみに団地を作りましたからな、水のひけどころはなし、雑水、汚水は、そのまま、川へ流すんですから、たまったもんじゃあないです、」

「……川に、蓋をしたいくらいよ、張り出していいなら、うちの前を蔽いたいわ、」

「なんでも、川の上は、いいとかいうことで、以前、海口の川岸の別荘では、張り出しを作って、そこに梯子をつけて川へ降りたり、張り出しの板の間に椅子など出して、涼んだりしましたですよ、」

京の貴船や、加茂川の岸に並んだ茶屋では、いづれも、川へ、床ゆかという板敷の座敷をしつらえ、簾で囲って、床の上で、客たちの遊興が行われる。

夏の蒸し暑い京の町では、川沿いの床は、今でも残って、季節の風物の一つになっているが、床の遊びも、以前のような華やかなものではなく、大勢つめこんでの宴會が多く、しつとりと、家族連れで、馴染の藝人を連れてというゆったりしたものではなくなった。

それでも、川風は、つめたく吹き通う。水にうつる灯のいろも、いつまでも心に残る。わたしは、そんなことを思い出しながら、うちの前の川のよごれが、見放されたままになっていることに、言いようのない不安と、自然への冒瀆をおそれていた。

わたしの恐怖は、現実化した。

三十六年の梅雨の終りの長雨のあと、集中して豪雨が降り、あっと思うまに、うちも水に浸っ

た。川沿いの土地ということで、建てる時は、松林があり、接近して家が建たないことを好条件としたが、土台を、萬一のことを考えて、普通より三尺高くした。しかし、浸水して、床上一尺五寸も水がついた。

この時、わたしには、すでに、家族はなく、初めての経験で途方にくれた。親しい知人たちに援助されて、ようやく、跡始末をして住めるようになるまでに、三週間かかった。

本や、家財道具の損失は、戦火のことを思えば、とるに足らない被害である。しかし、川が、氾濫したのは、六十年目と古老は言う。たとえ六十年目であっても、氾濫するにはするだけの手抜きが、至る所にあった。凡て、ひとが、その原因を作ったのである。

わたしは、それでも、この家を捨てて、ほかに住む所はない。

だが、川は、こうして見放されている上からは、いつ、再び水害を生ずるかもしれない。

「また、水が出ました、」

再びそんな羽目になったらどうしよう、わたしは、とつおいつ、雨の続いたびに、気が安まらないのだ。

市も、県の治水対策も、一つも親身なものはない。自分で守る以外に手はないのだった。

水害から三年めに、わたしは、もちものを整理したり、偶然兄の遺産がわけられたのを加えて、専門の建築家と協議の上、家の改築をすることになった。

「土台が、非常にしっかりしています、屋根組みも、頑丈です、骨組はそっくりこのまま、上げられる限度まで上げて、下は、完全なピロティにしましょう、」

「大体の予算は、こうなります、」

こまかい計算と、青寫真を見て、わたしは、これが、一世一代の仕事かな、と思った。ほかに、もう家は要らないのだ。自分の住む場所を、安全に機能的にすること以外、なんの望みもなかった。

元もと、この家は、川のそばに土地を選んだことも、家の造りも、凡て、わたしの責任で、昭和八年に建てた家である。賞も、戦争も、別れも……水害が三十六年、改築が三十九年という傳統じみたものを持っている。

そういう、その間の、身の上の変化はあったにもかかわらず、わたしは一步も、この家から出ていない。

川は、それを見ている。

今日も、男は川べりの道を、ぶらぶら歩いている。雑種のもしゃもしゃの犬を連れて、皺の深い顔に、よごれた運動帽をかぶって、苦い顔つきで歩いている。

わたしは、この男の家がどこにあるのか、まるで知らない。もう四十年も、川岸の家に住み、たぶん男も、三、四十年は住んでいるらしいのだが、わたしが、この男の顔を覚えたのは、水害のあとのことである。

流されて死んだ女の子の父親だと知ったのも、その後のことであつた。おかみさんもあの人に

違いないが、その顔にも、わたしは覚えがない。

川ひとつへだてただけの、両側の道には、商店はなく、静かな住宅地だが、川向うのことは、わたしには一切わからない。また、橋を渡って、川向うへゆく用もないので、わたしは、いつもの窓か、川べりの道かに出て、川を眺めたり、人通りを見ているだけである。

たしかに、川は、この四、五年來、澄んできた。ぴちぴちと魚紋を描いた水沫が、庭からも見える。堤防も出来て、コンクリートの囲いが、川べりをとりまいて、風情はなくなったが、颱風の雨でも、コンクリートの高さいっぱいの濁流が、海へ走り去るように波打つだけで、道まで溢れても、すぐ水は引く。

男の若いときの顔に、わたしは見覚えがないが、顔いろの悪い、皺だらけの男の、力ない姿を見ると、病人という言葉がぴったりした。なんの病気かわからない。肺だと言うひともある。

いつから男が働かなくなってしまったのかも、それも知らない。想像すれば、たぶん、戦後、勤めていた軍需工場が閉鎖されて、そこに働いていた工員たちのあらましが、米軍の基地へ勤めるようになったとき、男は、働かなくなったのではあるまいか。躰も、きつと長い間無理をしつづけて、弱っていたのではないか。なにもかも、いやになってしまったのかもしれない。

男のうちには、畑にしていた土地があつて、その土地を、どっと住み移って来た、戦後の勢いのいいひとに売ったり、貸したり、何軒かの地代をもとに、ほそぼそ暮しているのではなからうか。それに、おかみさんが働き者で、手傳仕事に出たり、山の畑に、家族の食べるものぐらいは作っている様子なのである。

男は、もうどうでもいいみたいになつてゐるやうにみえる。

関心があるのは、川と、川の鯉である。

日が当って、川の水が澄んで来ると、男は、川べりに立つて、じっと川を見ている。鯉の姿がみえないときも、いな、ぼら、がいっぱい群れていた。

わたしも、庭へ出た折に、川べりを少し歩いてみる。丁度あの男のように、わたしも、他處眼には、いつも、ぶらぶらしている女に見えるであらう。

川の流れは、たいして綺麗でもないが、水に日が当ると、硝子の破片のようなさざなみが立ち、上げ潮ときには、水がうねって盛り上って来る。さし汐に乗って、魚の群は忙しく上流へ動き、底へ沈む。

或る日、釣をしているひとがいた。餌もつけず、針を何本かつけて、川面に叩きつけると、ぼらが、二匹も、三匹も、かかつて来る。わたしは、暫く見ていた。

しなければならぬ仕事があるのだが、机の前より、餌もない針にかかる魚が不思議で、そこに立っていた。

「よくとれますね、」

「ええ、とれるけれど、」

「食べるのですか、」

「食べられますよ、でも、鳥の餌だね、いまは、ぼらなんか食べないよ、」

そこへ、ぶらぶら男が通りかかった。